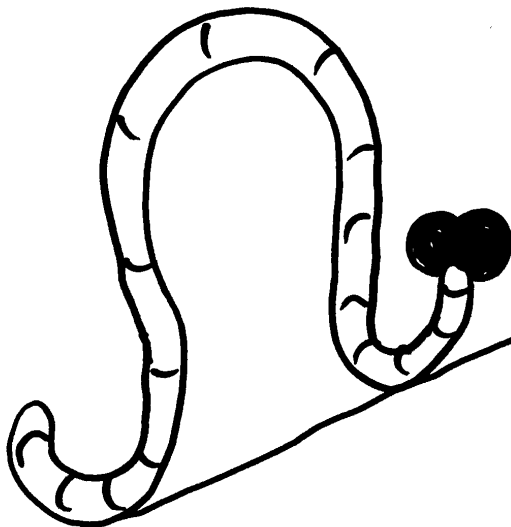
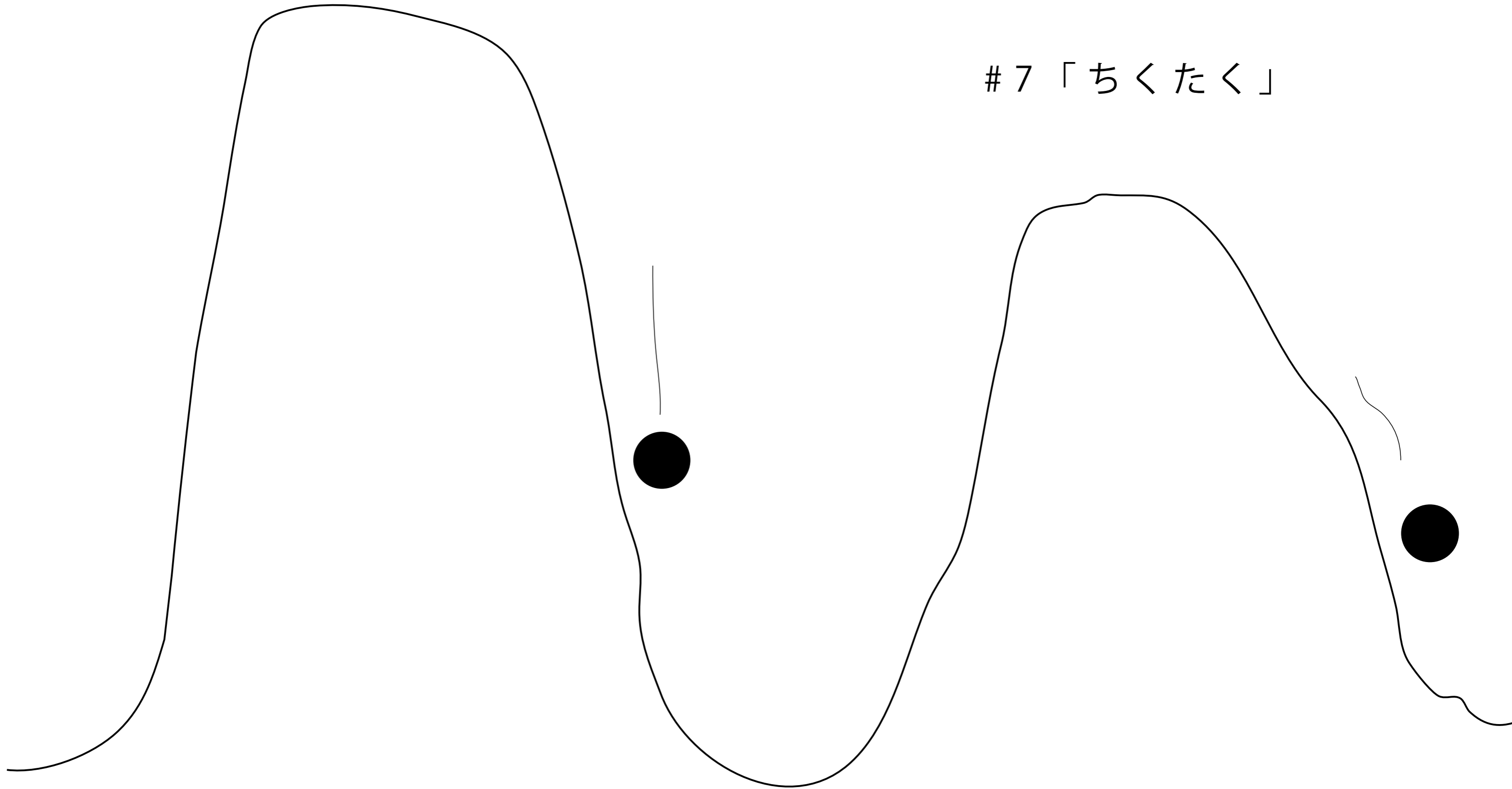


週刊

たまたま、

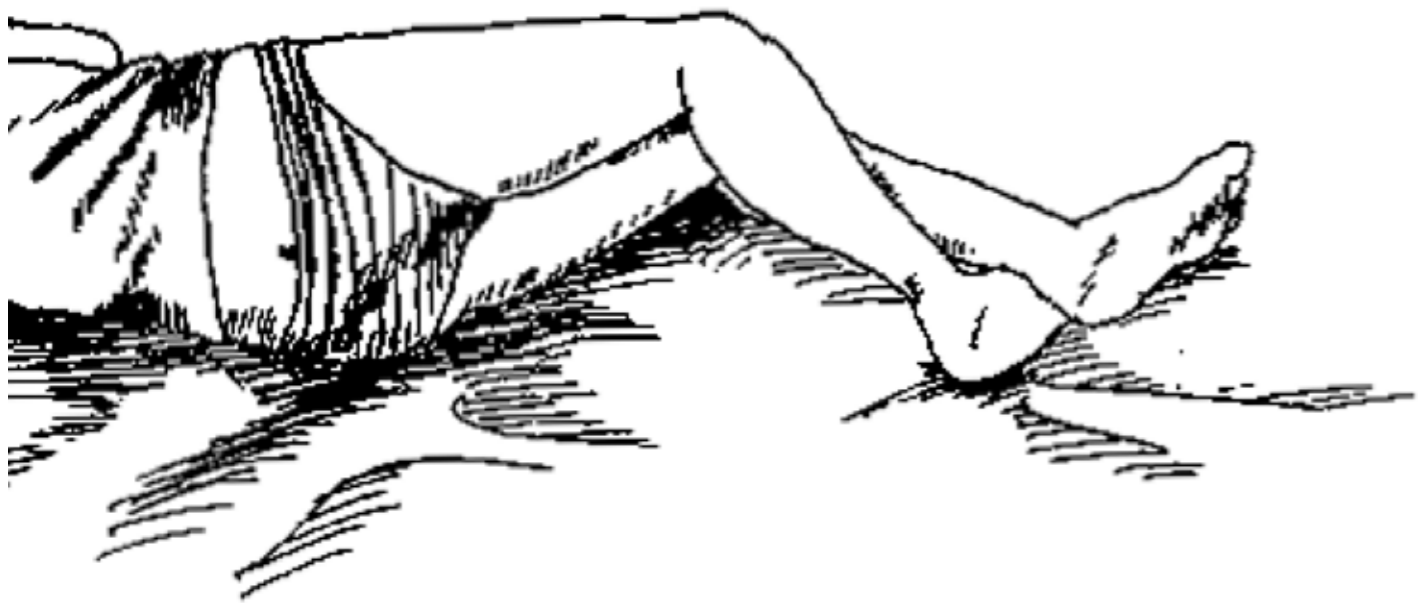


#7 「ちくたく」



2020年5月30日 だよ

アケミのともだちのひと



ウーッ
時間ッ
おもしろ



もう六月？早すぎる。はやく起きなければ、起きなければ、さもなければ、冬になっちゃう。毎日すぐ終わっちゃう。ひとやすみしてたら終わっちゃうてる。お待たせ！待った？ってさせてくれない。ケチ！わたしにだけやさしいのが好きだよ、時間くん。時間くんと毎日デート、チクタクうるせ！。

チクタク独白

カタい現実編

この音はもう聞かない。高校生の時のテスト時間の時、病院の待合室、家族と一緒に寝る時間によく聞いてた音だけれど、一人暮らしをしてからはチクタクいうものがない。でも、それでもこの音は「今日も死に向かっています」って音にも聞こえるから、嫌いだ。ママが「生まれた瞬間から人間は死に向かって生きている」とか、カタいようで残酷なことをよく言う。この話を聞きすぎてうんざりしたが、確かにそう。

死に向かっているってなんだ。私は死が怖くない。死に向かっているってことがなんか気持ち悪く、そう思うと今日も生きにくい。(死は怖くない)

生きてるものが絶対逃れられないもの、

宿命「死」だけど、死ぬ為に生きてるんじゃねえしな。私はそんなにつまらなくない。

私はそんなにつまらなくない。

(捉え方は人それぞれってこーいうこと) (なんだと思う)

(今日も「死」に向かう) (向かっている。チクタクチクタク)

チクタク独白

リアル現実編

ツツツツツ結ツツツツツ局ここにたどり着く。

チクタクなってる なってる チクタクチクタクチクタクチクタクチチチチ.....
なってるが、無意識なのだろうか、意識してるのだろうか

自分ではよくわからないけどさ

自分のことは自分がよくわかってるっていうじゃん。あれは私の場合はそうじゃない。

わからなすぎて自分どこにいますか??ってなるよ。自分の居場所なんて知らねえ。

こんな私と関わってあんたが私のことをどう捉えるかはあんたの自由だが、少なくともお互い自分を見れるから「会話」っつーのは役に立つのかもね。そうだね

見える見えるあんたの姿。あんたと関わってくる度に見えてくる。

チクタクと共に見えてくる、、、でもでも、でも、全てじゃない。

イメージで終わることだってあるし、イメージしまくりなだけなのかもしれないし、
は—————見えてる???本当に

(見えてる) (イメージかもしれない) (固定概念捨てて投げ飛ばして踏んづけてよく見て)
決めつけるな。あんたは私の中のあんたにすぎない。この前コツコツした時のように

「「本音出せ」」っつってもそれは本当のあんたじゃないかもしれない。

(よくわからない境界線) くだらないなんてことはい。これが私のいうチクタクの中での
お互いの存在証明、存在確認、存在形成。あんたの中の私、あんたの中のあんた、私の中の
あんた、私の中の私。みんなわかっててみんな行方不明。

(警察何人いても行方不明のまま) (み————んな行方不明) (だと思ってる) (思ってる)

もし私と関わって私が見えるのなら、別に教えてくれなくてもいいけど、理解して、
ちゃんと理解して。食べて噛んでちゃんと飲み込め!!!!!! (任意)

そしてなんか違うと思ったら吐いていいからちゃんと吐いてまた食べろ!!!!!!

私と関わった以上、無である、無意味な出会いだったなんて思うな。

出会いに無駄なんてことはない。捨てるか捨てるかは自由だが、人間と関わるっつーのは
こ—————ということなんだよ!!!! (って思う)

たまには自分を捨ててたまには嘘をついて、自分形成しな。誰から見ても全く違うような
形でもいいから。(みんなほとんどこれ) (まじこれ) (私もだと思う)

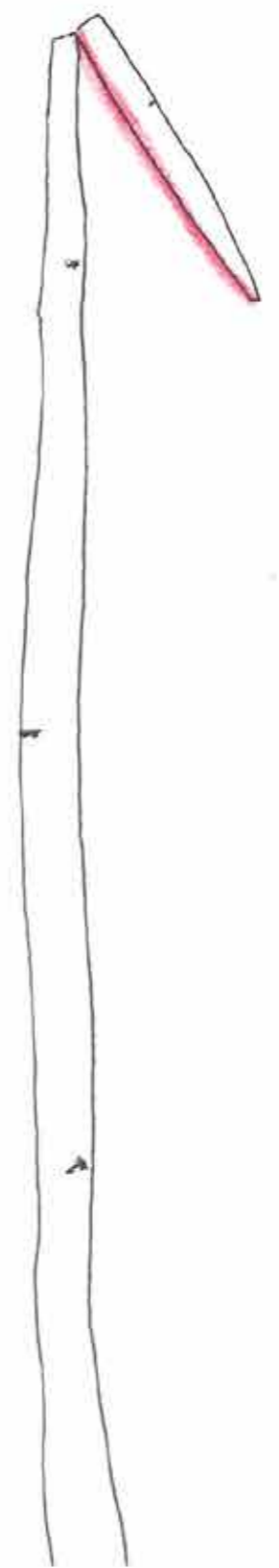
どっかにいるってことはちょっとでも自分が存在してるってことだに。

ミニズの皮むき

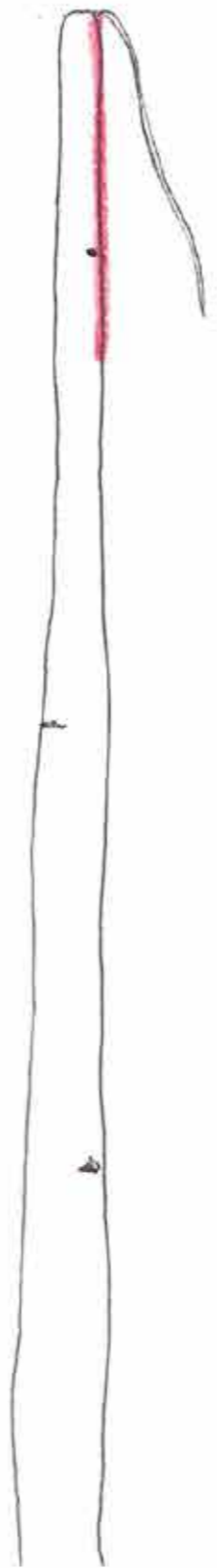
1. 葉をとってから始める



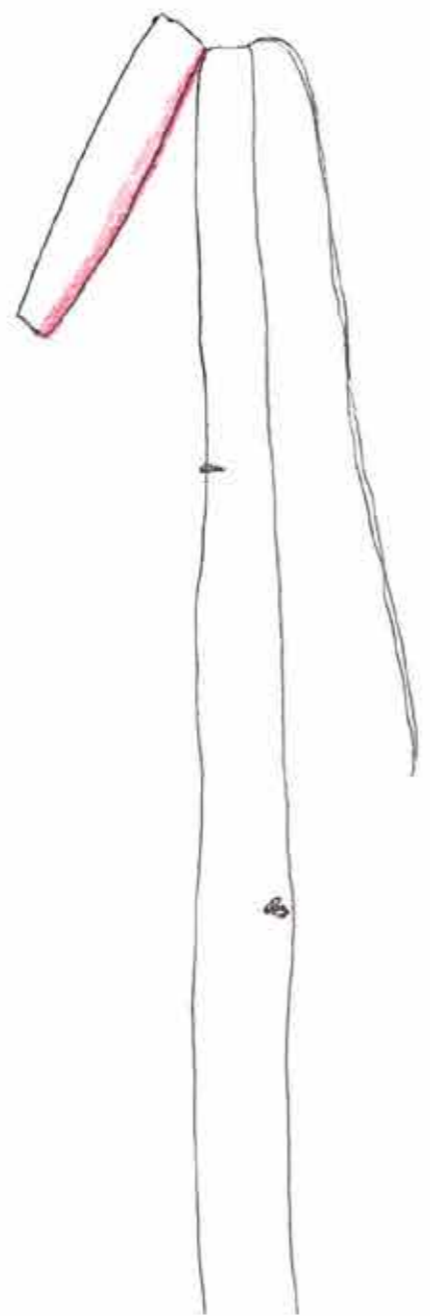
2. 上から5cmで折る折った先の皮から身をはなすその皮のニす折った身置いとく



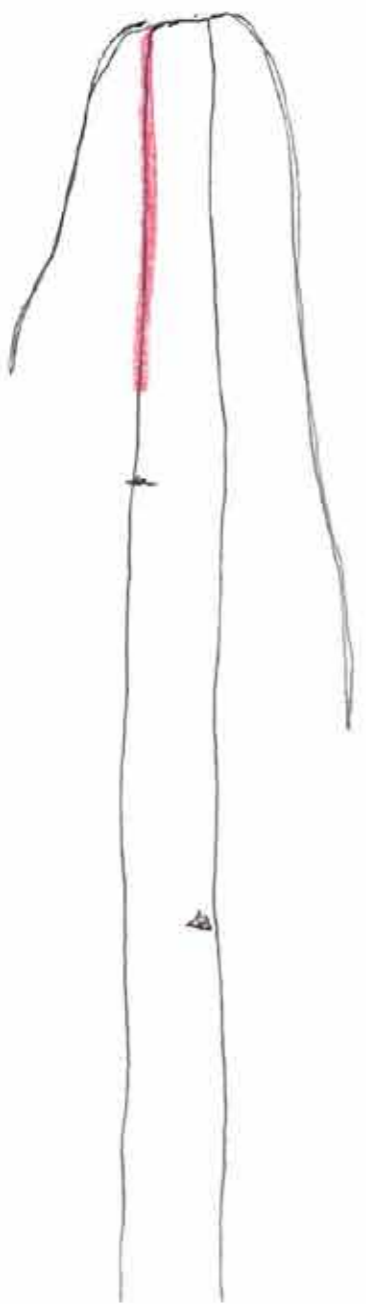
3. のこした皮をとり下に5cmむく



4. 皮むいた側の反対側に折る折った先の皮から身をはなすその皮のニす折った身置いとく



5. 3と4をくり返す



ミニズ… 別名ウワバミンウ、山菜の一種。発音はミニズ

告白

高校2年生の夏休み、夏の終わりの夕暮れ時に別府湾を望む的ヶ浜公園の砂浜で私は海を見ながら同級生のゆきこさんに告白をした。

ゆきこさんは耳が大きく鼻筋がスッと通った、美術高校に入学してからずっと気になっていた女の子。高校生にしては大人びていて、気が強くキリッとした表情が印象的な彼女のたまに見せるあどけない笑顔が大好きだった。

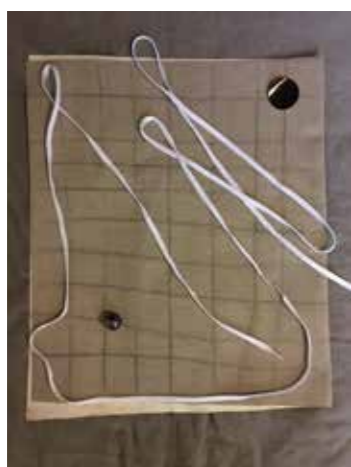
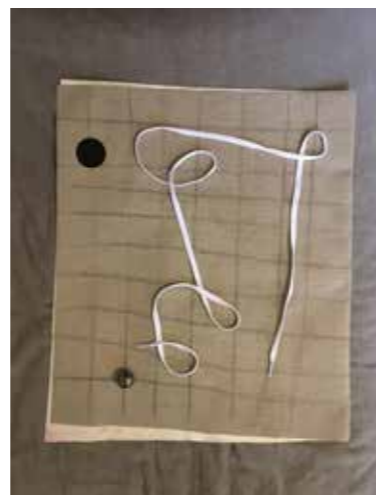
告白をする事を決めた私は、彼女に「海に絵を描きに行こう。」と本当は海なんてどうでも良かったが口実が欲しくてそんな理由で誘った。

私たちは砂浜に座り海を眺め、ちくたくと他愛もない話を取り留めもなくしながら絵を描いた。太陽が海に沈みかける瞬間、世の中がオレンジ色の光で包まれる中、私は彼女に告白をした。その時彼女がどんな表情をしていたのか、答えまでどれくらいの時間が経ったのか、ましてや答えすら覚えていない。

いまでもたまにその告白後の空白の時間を思い出し、あの時私はUFOに囚われていたんじゃないかと考える事がある。

「ゆきこさん、あなたが答えをくれた瞬間、私は地球にいませんでした。申し訳ありません。」







タイトル 週刊 たまたま、# 7「ちくたく」
参加者 伊東あけみ、鈴木玲美、たなかいくえ、宮崎勇次郎、下山健太郎、鹿野稜介
発行日 2020/6/1
発行 東京造形大学 CS-lab
〒192-0992 東京都八王子市宇津貫町1556
編集 下山健太郎

